

群馬県議会議員 入内島 道隆 県政報告

VOICE OF GUNMA Vol.11



今回の一般質問は3回に分けてVOICEにて報告させていただきますが、最終回はなぜ地方主権なのか、と言う問題の本質に迫るものです。それはデモクラシー（民主制）という切り口で質問します。

そもそも政治とは私たちが私たちのことを決めることです。しかしながら、私たちのことを私たちが決められなくなっている政治に対しての不満が政治不信を生み、政治離れを引き起こしているのです。ですから、政治不信を払拭し、政治に関心を持つための唯一の方法は私たちが決められる範囲に政治があることと言えます。そのためには中央集権ではなく地方主権に制度を作り替える必要があるという趣旨で質問を展開します。

一般質問 / 令和6年第3回定例会

Q3 デモクラシーという視点から

入内島道隆

最後はデモクラシーという視点です。なぜ民主主義ではなくデモクラシーという言葉を使うかなんですけども、日本では、デモクラシーを民主主義と訳しました。でも、これは明らかな誤訳なんです。デモクラシーの語源は、デーモスとクラティアです。つまり、民衆と政治というのがこの言葉の原義です。ですから、民衆政というのが正確な訳になります。これを民主主義と訳してしまますと、デモクラティズムになってしまって、イズムになると、固定された考えとか、正しいものであるという主義になってしまうわけです。でも、デモクラシーは、本来、多様な民衆の意見をいかに集約するかということに意味があるわけです。

その民衆の意見の中には、正しいものもあれば正しくないものも含まれてくるわけです。でも、正しいものだけじゃなくて、間違いもあるけれども、それが民衆の意見なので、それがデモクラシーになるわけです。したがって、間違いも起こすわけですね。でも間違いは、自分たちが犯した間違いなので、間違っていたね、修正しなくちゃねという修正力が働くというのがデモクラシーの本来の意味だと思うんです。

ところが民主主義で決定したというふうに言われてしまうと、もうこれは動かし難い事実、真実なんだというイメージになってしまいますので、民主主義という言葉ではなくて、デモクラシーという言葉で議論したいと思っています。

デモクラシーにおいて何が一番大事かという、民衆の考えが認識できる距離に政治が存在することだと思うわけです。歴史的にも名君と言われる人がお忍びで城下町に出ていったなんていう話を聞かれますけれども、その名君が何を知らなかったかといえば、民衆の声ですね。一般民衆がどういう考えを持っているのかということを持って政治に生かしたわけです。デモクラシーにおいても、民衆の声をどう反映させるかが大切だと思うんです。

日本は本当のデモクラシーかと言えば、私の考えでは、テクノロジー、つまり官僚制に近いんじゃないかなと思っています。そういった意味で、デモクラシーを私たちの手に取り戻すというのが、今必要なことだと思いますし、そのことによって、一般市民の主体性といいますか、自分たちの考えが政治に実現できるということになれば、他人事ではなくりますので、冒頭に申し上げました依存主義から脱却できて、本当の民主主義、デモクラシーが実現できるんじゃないかなと思うわけです。

先ほど知事からも、州ごとに税金が違う、消費税（売上税）が違うということをお話いただきました。オレゴン州とかモンタナ州は、日本の消費税にあたる小売売上税がゼロ%ですね。多い州でも10%くらいだと思いますけれども、その州ごとによって税金が全く違ったりするわけです。そのメリットは何かというと、その自治体の数だけ、いろんな試行錯誤ができると思うんです。ですから、その自治体の数だけラボラトリー、実験室があるとよく言われますけれども、日本も、47都道府県がもう少し主権を持てるようになれば、47の実験室ができると思うんです。いろんな試みをそれぞれの都道府県がやって、あそこのやっていることはなかなかいいよというふうになっていくほうが、国が一律に全てを決めて47都道府県にやらせるよりも、はるかにいろんな実験が出るので、活力が生まれてくるんじゃないかなと思います。

そして、都道府県がまたミニ中央集権的になっても意味がなくて、1,718市町村があるわけですから、その市町村の裁量も県が認めていくということによって、それぞれの市町村の活力が生まれてくるんだと思います。

今、一番問題なのは、やっぱり国が決めたことが県に下りてきて、それが市町村に下りてきて、こういうことになっていますから、そうじゃなきゃ駄目ですよということを、私が首長るとき、随分職員の人に言われました。国で決まっていますから、そんなこと言ったら駄目なんです。でも、そういうふうに言われ続けると、思考停止に陥って、何か新しいことを考えてやろうという気が起きなくなってしまうんです。

ですから、地域の独創性を生かすという意味でも、ぜひ地方主権というのは大事なんじゃないかなと思うんですけども、その独創性の観点から、知事の所感をお願いします。



山本一太知事

道州制の議論で言うと、先ほどちょっと申し上げたとおり、2008年ぐらいに骨太の方針に入って、すごく盛り上がった後、ちょっと火が消えていくように収まっていくんですね、その熱が。それで、2018年に、岸田前総理が政調会長だったときに、自民党には総裁直属の機関というのは幾つかあって、外交戦略調査会かな、それと道州制の検討会って解散になりましたから、だからそんな形で、やっぱり道州制の議論というのはかなり収まってきたのかな、かなり盛り下がっているのかなと思ったら、少し前の日経新聞だったですかね、一、二か月前の日経新聞に、経団連が軽井沢でやった夏季のセミナーで、久しぶりに道州制の議論が出たと書いてあって、それは政府の提言の中に盛り込まれたというから、調べてみたら、それは、地域経済の活性化、それぞれの独自の文化とか、その資源を生かした地域経済の活性化は道州のほうができるというのと、もう一つあったのが、地

域住民の参加を高めるみたいなことだったんです。そこはデモクラシーなんだと思うんだけど、でも、道州制になったからといって、地域住民の参加意識が高まるのかなというのは、ちょっとよく分からないなと思っているんですね。

今日の議論は、何度も言うように、二元民主制の県議会のことはちょっと横に置いて、知事の立場で言っているんですが、このデモクラシーということ考えたときには、今の状況の中でも、体制が上がっても、それぞれの仕組みもあるんですけども、政治家の努力というの必要なんじゃないかなと思って、でも、今日来られている県議の皆さん、みんな後援会があって、それぞれいつも地元を回っているわけですね。だから、地元の声を吸い上げておられるから、私も県民の声として受け止めているわけですね。

私も知事ですけれど、政治活動の部分で言ったら、70後援会があって、全部動いているわけですね。そうやって一生懸命自分なりに吸い上げようとしている。知事として言うと、未来構想フォーラムをやって6,000人の県民と直接話してきたわけですね。ふらっとCafeをやって、全部動画で公開して、お話ししたい人を集めているわけですね。PoliPoli Govとかをやりながら、いろいろ若者の声とかも集めているわけですね。

こういう、やっぱりそこはリーダーシップみたいなところに実は関係しているので、デモクラシーって、市民との距離とか、住民との距離とか、仕組みを変えたらというものじゃなくて、政治のほうの努力もあり、有権者のもちろん意識啓発もあると思うんですけど、そういう中でできてくるものじゃないかなと思うんですね。

アムステルダムというまちがあって、物すごくリベラルで有名なまちなんですけど、ここはドーナツ経済という、入内島県議が結構好きな、脱成長一派みたいな、ドーナツ経済の実践をやっているんですけど、やっぱり市民参加というのはすごくやっている。サーキュラーエコミーなんかをやったって、別に自分に短期的に得がないじゃないですか。だけど、そういうことで地球環境に優しいと、やっぱり経済成長を追いかけられないじゃないかと、みんなが幸せになる道を歩もうということ、あまり短期的な得はないのに、相当、市民の人たちがそういうセミナーとかに行っているわけじゃないですか。

そこにはいろいろ行政の努力とか啓蒙みたいなものもあるので、だから、道州制にしたら民意が酌み取れるようになるみたいな、市民参加が促されるみたいな議論にはあまり同調できないかなという気がしますが、常に、今言ったデモクラシーのことは意識して、県庁というか、県政を運営していかなければいけないと思っています。

入内島道隆

私、道州制はあまり好きじゃなくて、都道府県単位の連邦制なんです。知事はいろんなフォーラムをされたりとか、直接声を聞こうとされていますけれども、直接声を聞くというのは意外と難しく、私も小さな町の町長でしたが、本人に面と向かって本当のことを言ってくれるかという、なかなか言ってくれないんですね。ワンクッション置いて本当の声が入ってくるというのはありますので、そこはやっぱり難しいところじゃないかな。先ほど、名君が城下町に出てお忍びで声を聞くというのは、やっぱりそこまでしないと、なかなか本当の声は拾えないのかなと思っています。

最後なんですけれども、「群馬自治」という、この冊子に、板倉の栗原町長が寄稿しています。その内容がとても参考になるので、ちょっと要約して紹介させていただきたいと思います。

板倉の人口は2万人弱いたわけですけども、2050年には1万人を切って9,000人ぐらいになってしまうと。中央集権体制がずっと続いたけれども、そして地方分権がずっと叫ばれていたけれども、なかなか地方分権には進まない。地方分権に行く前に、地方自治体が消滅してしまうよということを書かれています。

裏面に続く



また一方、中央は全てを自家補給でできているわけではないという言い方をされています。先ほど地方から都会に人口が行って、都会はそのサイクルを回しているという話をしましたけれども、それと同じことを言っておられて、地方がバックアップしているんだと、その地方がなくなったら、中央もなくなって、国自体が消滅の危機にあるんだよということを言われています。最後に、国民も、幸せは国がくれると他力本願では、結局自分で自分の首を絞めることになるということも言っています。これはローマの話とも通じるところなんですけれども、やっぱり主体性のある個人がいなくなっていくということが非常に問題だということです。ですから、その主体性をどう回復していくかということが一番の目的なんですね。ですから、主権がどこにあるかというのは、より近いところで物事を決定できるようになれば、関心を持って、自分事としてみんな受け止めてくれるようになるだろうと。そうなれば、誰かにやってくれじゃなくて、私たちでやろうよというふうになると思うんです。私たちがやろうという、その組織を、小さな単位でもいいと思うんです。5人とか10人でもいいと思うんです。そういうのをつくっていくということは本当にデモクラシーじゃないかなと思います。

その第一歩として、地方主権、まず都道府県が自分たちで物事を決められるようになると。それがうまくいけば、市町村が自分たちで決めていいよと。市町村が決められるようになれば、それぞれの自治会で決めていいよというふうになっていくということが大変大事なんじゃないかなと思っていますけれども、知事、何かあれば。

山本一太知事

最後に1つだけ申し上げたいのは、はっきり言って、今、地方分権、不十分なところがあります。残念ながら国との連携がないと進まないこともあります。ただ、私は1つ申し上げたいのは、国のせいにしたことはないから。国が悪いから県でこういうことができるということを言ったらおしまいでしょう。それは、いろんな知恵と工夫を使ってやっぱり乗り越えていかなきゃいけないですね。

だから、それぞれの市町村でやっていることは常に注目していますけれども、県が悪いからこれが進まないという言い訳をする前に、まずは自分で工夫をしているいろんなことをやると。国が、群馬県が、ここまで頑張っているというところを見てくれれば、こういうやり方もあるんだなと気づくかもしれない。

やっぱり基本的には、そういう気概を持った人たちが地方自治をつくっていくかなければいけないということを最近強く感じていることを、最後に一言申し上げて、終わりたいと思います。

入内島道隆

知事、そのとおりなんですけれども、上記の栗原町長のように考えている方がいることも、そして私もそう考えていることも事実ですので、そこはやっぱり酌み取っていただきたいと思っています。



こちらのQRコードより今回を含め、今までの入内島道隆の一般質問の動画がご覧になれます。是非ご視聴ください！

あとがき

今回の質問のテーマは国家の根幹に関わることで、県議会の一般質問の枠を超えています。しかし、こういった議論が不毛の議論であるかという、そうではなくて、とても重要な議論であると考えます。ただ、知事との質疑で結論が出る問題ではなくて、まずは問題提起といったところです。

明治維新では藩を解体して県に置き換え、中央集権国家に大改造しました。つまり260大名がそれぞれの領地を収める封建国家を天皇制の日本帝国に作り変えたわけです。そしてドイツを手本として憲法を制定し、富国強兵に邁進したのです。日清戦争、日露戦争と勝利を収めました。最後は米国にやらせられ、原発の実験台にされたわけです。

戦後はGHQの管理下におかれ、憲法も彼らにより制定され、サンフランシスコ講和以後も独立国とは言えない日米安保、日米地位協定の管理下に日本はあるというのも事実です。

しかし、そういう中でも、日本独自の国柄というものを大切にする方法はないかと考えたとき、国としてではなく地域単位であれば、可能だろうというのが結論です。で、そのためにどうすれば良いかという都道府県という単位を生かして主権を持つ、つまり都道府県単位の連邦制にすることで、国の関与を極力制限することができると思うんです。国の関与を制限するということは同盟国の関与が地方まで波及しないようにするということです。そういうことを念頭に知事の考えを伺ったというのが、今回の質問です。



最後にひとこと

入内島の言っていることは難しくわからん、もっとわかり易く書けないものかというご意見を頂戴します。それは私の表現能力の未熟さと語彙の少なさに起因するので、お詫びしなくてはなりませんし、文章力を磨かなければと思っています。その上でことになりませんが、現実にはそう簡単なものではなく、複雑に入り組んでいるため、簡単に表現しすぎて、正確さを欠いては元も子もないものも思っているのです。そこは大変むずかしいところです。

直接聞いたわけではないのですが、福澤諭吉翁はお手伝いさんに話して、文章のわかりやすさの塩梅を工夫していたという噂を聞いたことがあります。私も真似して見て、事務員さんに話して、感想を聞いたりして、手直しして見たりしています。

一方で、このVOICEを見ていただいた方から、深く考えて

いて、とても勉強になる、というご意見もいただきます。ややこしい文章であることに変わりはないのですが、じっくり読んでいただいて、感想をいただけるというのは、誠に嬉しいものです。

世の中を変えていく原動力はどこにあるのか、それは一個の政治家ではなく、輿論（世論）にあります。輿論とは日本国民の思考の総体であります。初めは細い一筋のせせらぎ程度のもので、せせらぎが合流することによって川となり、その川と川が合流し大河となり、つまり輿論になるのです。

私は初めの細い一筋の流れを作りたいと思っています。しかし、それは、細い流れではあっても、その水は良質でしっかりと流れていて、やがて国の根幹を為すような事になろうとも、大筋において間違っていない流れを作りたいと思っています。

そんな流れを作れるのかという話になるわけですが、日本国という国の歴史を紐解いてみると、何も大上段に構える必要はなく、過去の国造りに対して誇るべきことがたくさんある事に気づくのです。そのことをもう一度私たちが再認識することができれば、そのことで目指すべき日本の姿は見えてくる事になります。

例えば、江戸末期になると多くの外国人が日本に訪れています。彼らが一様に日本人の生活に驚いています。まず、日本人の識字率に驚きます。当時の先進国である欧州の国々を遥かに凌ぐ識字率です。欧州は階級社会ですので、上流階級はそれなりの教養を備えています。そこまでは驚きません。しかし、日本では武士階級のみならず、多くの人々が文字を読めました。寺子屋の果たした役割も大きいのですが、多くの外国人が驚愕しております。

さらに、日本人の道徳心にも驚嘆しています。忘れ物や紛失したものが手元に戻ってくるのが彼らの文化にはないことです。しかも、日本人はそれを当然のこととしています。謝礼を渡そうとしても受け取らない日本人に驚いています。

こういったことは、国力（GDP）とは関係ありませんが、これこそが国家の品格というものではないかと思うのです。国民の道徳心の高さこそが、評価されるべきものだと思うのです。経済成長のためには他人を蹴落とし、国力（GDP）を高める事にどれほどの価値を置くべきか再考する必要があると思うのです。

産業革命以後の世界の潮流は成長ありきです。富の追求が最善の結果をもたらすとした欧州が世界を植民地にしました。その同時期に日本でも経済成長を志向しました。しかし、渋沢栄一という人はそれだけではうまくいかない事を知っていました。「論語と算盤」という本がありますが、算盤（経済成長）だけではいい世の中はできない、論語（忠恕：誠実さと他への思いやり）がなければいけない、と看破したのです。

論語なき算盤がどういう結果をもたらすか、格差社会であり、不安定な国家であり、それは個人のレベルから国家のレベルまで社会全体を覆いつくす黒い雲です。私たちの先人はその事を重々承知して日本の原型を作ってくれたのです。そこを大切に変わる事なく日本という国家をもう一度再点検して行きたいと思うのです。



森林・林業・林産業活性化促進議員連盟視察

VOICE OF GUNMA

編集・発行責任者：群馬県議会議員 入内島 道隆 / 〒377-0601 群馬県吾妻郡中之条町四万 3838 湯元 四萬館内 / 電話：080-9469-2003 / WEB サイト：https://iriuchijima.jp/